



TITLE:

新マルス主義に関する英語通俗書 解題

AUTHOR(S):

山本, 宣治

CITATION:

山本, 宣治. 新マルス主義に関する英語通俗書解題. 経済論叢 1923,
17(1): 135-144

ISSUE DATE:

1923-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128040>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第七十卷 第一號

大正二十二年七月一日發行

論叢

賣上税の缺點……………法學博士 神戸 正雄
私經營統計概論……………法學博士 財部 靜治
文化的認識と歴史的認識……………法學士 恒藤 恭

時論

農村問題と其の救済策……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

『諸國民の富』のダブリン版に就て……………法學博士 河上 肇
歴史派經濟學發達の徑路……………法學士 山口 正太郎
公娼の前借金に就て……………經濟學士 岡崎 文規
中世末期に於ける村落の結合を論ず……………牧野 信之助

雜錄

米國の新關税法に就て……………法學士 高橋 康順
新マルサス主義英語通俗書解題……………理學士 山本 宣治
アダム・スミス生誕二百年記念會記事……………委 員

新マルス主義に關する 英語通俗書解題

山 本 宣 治

大戰によつて大打撃を受けた歐米諸國民衆各個人は物資の缺乏と其他の經濟的不安に基づく

雜 錄

新マルサス主義に關する英語通俗書解題

生活難に脅かされて、もはや從來の如き無制限生産を繼續する事は不可能となつた。社會全體としては健全且つ優良な青年を大砲の餌食に惜氣無く献じ終つた揚句、其反面に於て社會的劣者の繁殖力旺盛なるに困り果て、爲政者も何とか方法を講じたいと考へさせられて居る。此際優生學的に新しい色彩の加はつた新マルサス主義の勃興普及するのは當然の現象であるが之に大戰が破壊し去つた舊來因襲道德の廢墟の中から人性力説の新しい性倫理のうまれ出でんとする一の徴候を認める事が出来る。斯様な狀況の中に新マルサス主義是非の著述が續出するが、其内特に専門的なものの外に民衆一般の智識慾を充す爲に多くの通俗書が現はれ、特に英語で記された物は盛に我國にも輸入されて讀まれて居る。所が其書の學問的價值が讀者に充分に會得されない事もある故、案外つまらぬ書が珍しうに暇つぶしに翻譯されたり、又は價值多い良書が「通俗的」の名の下に専門家からゆはれない輕蔑冷遇を受けて居るやうだ。其故今此所に

予が最近に目を通した本の中で特に日本の讀者に得易い且又親しみ易い英米のものを列舉し、簡単な内容紹介と批判を試みる。其は當然讀まるべきものを推奨し、又一面「横文字で書かれた愚書」の世迷言の爲に金と時とを浪費せぬ様にと、腦力節約を目的として居る次第である。

I. Margaret Sanger の著書

(1) (1719) : The Case for Birth Control. 二五一頁

避妊法智識の普及を妨げる爲に存して居る既存法の條文(“Comstock Bill”の一節)に關して立法官の考慮を求める爲に認められた陳情書で、第一章、序論、第二章、諸國に於ける産兒調節の由來と實行の現狀、第三章、人口と産兒調節、第四章、乳兒死亡率、第五章、妊娠による母の死亡率と病症、第六章、家族膨脹を避くるに用ひらるゝ有害な方法、第七章、賣笑白痴及び生殖器官、第八章、其他の傳染病と窮民、第九章、結論と大家の意見の各項に分け、何所でも有り勝な法律家の生物學的常識の缺乏に對し、親切に囑

んで含めるやうに、事實と統計表と大家の意見を掲げて、一目瞭然たるやうに簡潔にしかも内容豊富な纏め方がしてある。表現の仕方はポピュラーであるが、内容は決して「通俗的」でない。但し缺點を強ひて探せば、一九一七年迄の事丈で其後の大變化が之丈では知る事が出来ない事であらう。

(2) (1922) : Woman & the New Race.

之は既に邦譯が出て居る筈、婦人自身が妊娠調節の事を鋭く反省する爲に書かれたもので、事實を知らんとする學者に讀ますのでない事を諒とせねばならぬ。一般に女の書いた物はこまやかな繊細な情にみちあふれて居て讀者の情に訴へる所が多いが、之が其長所であり且又缺點であつて、わかりきつた事(専門研究者にとつて)をくぐくぐと引延ばして書いてあり、可成忍耐強い男でもともすれば苦められる事がある。一般向として其もやむを得ないが、獨の Mabel Hess 英の Marie Stopes 皆予の眼から見れば斯様な長所と缺點とを見出し得るのだ。併しサンガ

一 女史に於ては此特徴が比較的乏しく、女性固有の鋭い直観が適度の感情と配合されて科學的に比較的簡潔な形式を以て表現されて居るのに感服する外はない。

(3) (1922) : The Pivot of Civilization. N. Y.

二七九頁

H. G. Wells の序文。前半には主として U. S. Department of Labor : Children Bureau の Infant Mortality Series を根據として、無知な母達が徒らに産み徒らに殺して居る實狀を、マザーと如實に描寫して婦人の自覺を促して居り、此兇狀に對する所謂慈善事業は單にブルジョアの氣休めや暇潰したるに留まらず、更に白痴者先天性犯罪者の増殖を圖る點に於て一般社會に對して積極的に有害且殘酷な所業だと痛棒を下して居る。

後半では、或一派の社會主義者特に正統マルキシストと自稱する者が、此産兒調節の企は無産者の生活を割に樂にするから却つて當然來るべき痛烈な階級闘争の到來を遅からしめんと信

じて新マルサス主義に反對するのに對し、斷乎として産兒調節が今の無産者にとつて又來るべき社會革命にとつて必要な理由を擧げて居る。

即無産者の無調節産兒は自覺勃興の力を缺く愚民を増加し、徒らに卑屈不徹底な裏切者と罷工破りと中腰者などを増す許り、無産者の戰鬪力は決して數の増加に正比例して加はるものでない事を主張し、併せて從來のマルキシストが單にパンの分配のみを解決すれば無産者の Millennium が來るかとの如く思ふて居た事に對し、新時代の實現はとかく經濟的要件のみを以て機械的自働的に遂げ得られるものでなく、色食の二大懸案中孰れをち閑却する事は出來ない。將來の社會に於ては自由人として一半たる女の立場は尊重されなければならぬ、男女兩性の同格にして異種たるの本性 Sexuality から女性の自由産兒權の主張即産兒調節が將來の文明の樞軸となるべきものだを結論して居る。

あの女らしいやさしい女史にして此説あるかと驚くやうな堂々たるもので、評者は因襲的不

徹底な性教育の徒勞を罵倒する點に於て特に痛快を叫んだ、蓋し情理を盡し且有益な獨創的暗示に富む此書は、彼女の説に同すると否かを問はず、必讀のもの云ふても過言であるまい。

(4) (1922): The New Motherhood. London.

二四四頁

世のあらゆる妻と娘の爲に記された本で母として當然抱くべき責任の自覺から産兒調節の必要な事を、やさしく叮嚀に説いてある。無垢の處女が顔を赤らめるやうな性智識技巧には全然觸れてないから、よし日本の女學校で譯讀の教科書に用ひても別に差支へない程のものである序文は性學者 Havelock Ellis と經濟學者 Harold Cox が書いて、女達の心を強からしめるやうに重石が利かせてある。宣傳者なら參考によむべく、學者ならまづ讀む必要もないが、女子大學に通ふて居る娘によませる必要がある。

二、Masie Stopes の著書

此著者の有する肩書 Doctor of Science, London
Doctor philosophic, München; Fellow of University

College, London: F. R. S. L.: F. L. S. で知れる通り、彼女は生物學の大家であり特に化石植物學に精通し替ては東京の小石川植物園にも來て材料を集めた事もあり、日本紀行や能に關する著述もあり、其他劇や詩の創作をも有する程の趣味の人である。女史を知る或人の印象では多少神經質な理想家だといふが、斯様な人格の表現は次に掲ぐる有名な三部作の隅々に迄行渡つて居る様に、知らぬ者にも感ぜらる。米國での初婚は失敗に終つたが英國に戻つて性改革に於ける同志 Humphrey Verdon Roe 氏と結婚し、夫妻相携へて 61, Marlborough Road, Holloway London に一九二一年三月初め The Mother's Clinic を開き、直接無産者婦人を相手に産兒調節の具體的智識を普及する爲に努力活動して居る。尙一方 President for Constructive Birth Control & Racial Progress として花々しく論壇に陣を張つて宣傳中である

サンガー女史の著書とストープス女史のそれと比較して特に英米の國情の對照を發見し得

る點は、北米合衆國では例の Comstock 箝口令あるが爲に前者は公刊書に避妊技巧に就て一言も云ふ自由を有せず（秘密刊行物たる Family Limitation は例外）、唯社會學的に取扱ふて居るに反して、慣例を重んずる『常識的英國』ではストープス女史の生物學的立論を拘束する法律も無く、後者は女史の Deceit を傷つけぬ範圍内に於て自由無礙に閨房の秘事を取扱ふて居る事である。尙一つの對照は前者が露骨なマルクス主義的色彩を現はして居るのに對し、後者は我有島武郎氏の如く智識階級の一員たるにふさしい聰明さを以て階級意識を精々ばかし乍ら啓蒙事業に與つて居る様に見受けられる。

斯様にして前者の公刊書は大體として醫學には無關係であるが、後者の作品には既に世に認められた性智識以外に『何だかさうありさうな氣持のする』種々の假説が可成大膽に述べられて居り、臨床醫家も性智識に關する婦人の心理を推測するに有益な教訓を得るであらうと思はれる事が多いのが其特徴である。

(5) (1920) : Married Love. 9th. Edit., London
一八〇頁

此三部作の中で之が最も世間を騒がしたもので、初版（一九一八年三月）以來版を改める事九回、出版部數は一九二一年十月迄累計十六萬一千部に登つて居る。譯は既に佛、獨、蘭、丁抹、瑞典語にある。之迄 Havelock Ellis といふ巨星はさておき、其餘に性學的に何の見るべき物を有しなかつた『品行方正人格高潔』なる英人が、今俄に斯様な劃世紀的（しかも女性自身によつて書かれた）貢獻を得るに至つた事は一種の奇蹟であるが、此書が激烈な非難を受け乍ら終にブルジョア英國の上下に行渡つた事は、戰爭の爲し遂げた思想革命に於ける興味ある一事實である。

卷頭に英國派生理學の重鎮 E. H. Starlings 教授が推讃の辭を書いて居る事がまづ吾人生物學研究者の注目を惹く點。「若き夫と其他戀愛結婚をせやうとするすべての人」の爲に、結婚前の女性の微妙な心理から始めて、結婚生活中の

女性心理を科學的に且つ慎重な筆で描寫し、女性に於て特異な表現形式をとる性愛に關して、特に夫たるべき男性の理解同情を促さんと試み、從來の無知の爲に起つた家庭悲劇やヒステリーを減する爲に、夫婦の相互調整の必要を説き、詳細に種々の方法に迄説き及ばしてある。其所論は性學と大體に於て肯定さるべきものであり、學者非學者の別無く一讀の必要がある。

此書の全譯は本で必要だが、今迄某婦人雜誌に一部抄譯を見た丈けであるのを遺憾とする。伏字や抄録は本書にとつて無用である。時勢は變りつゝある、聰明な當局が其を許すのも遠き將來であるまい。

著者の創見と見るべきは、女性々慾の週期性の事で曲線二圖を添へて説明してある。之は引例の内容が不明だから一の Suggestion として參考迄に知り置くべきもので英人の間丈にても一般に適用さるるかは疑しく、まして環境要件を異にする我邦の女性に早速適用し得べき説であるまい。

尙女史は古い一文獻を引用して、性交に際し當事者中特に男の注意を或高遠な理想的概念に向ける事によつて〇〇を停止せしめ、しかも健康に害無き一種の Coitus reservatus たるに "Karezza" の可能を説き、支那の神仙の祕法と稱へらるゝもの又は道教の一部、説く所に類似したものを述べてゐるが、此説は俄に首肯し難い。

(6) (1921); Wise Parenthood. The Treatise on Birth Control. 7th. Edit. London. 五六頁

之は前の續篇として既婚の者に對して妊娠調節の法を説いたもの、但しサンガー女史のもの程に概括が纏まつて居す、特にベツサリ使用に執着して居る嫌がある。卷末に附録として彼女の The Mother's Clinic の歴史があるが、注目に値ひする。直言するならば、此三部作の中で讀みこたへする點に於ては(5)(7)(6)の順序であり、Family Limitation を讀んだ上ならば、之は寧ろ省くも可であらう。

因みに本書は Handbook for Birth Control を銘

がある爲に、神經過敏な當局の早わかりする所となり、書店に「懇談的」に命じて輸入禁止したと傳へられて居るが、左程騒ぐ程のものとも解釋致し兼ねる。

(7) (1920) : Radiant Motherhood. A Book for those Who are Creating Future. London. 三三六頁

若い夫達や將來の人間を創造して居る人々の爲に記されたもの。適當の時を擇み進んで子を設けやうとする夫婦の問題を取扱ふて、貞淑な女の感情を傷つける事も無くて、充分科學的に卒直な記載がしてある。

三、其他の單行本

(8) (1921) : The Control of Parenthood. London 英國々立出生率調査幹事 (Secretary of the National Birth Rate Commission) James Marchant の編輯した論文集で出生率減退と産兒調節に關して英國當代の學界宗教界政界の大家の胸藏無い意見が網羅してある。新マルサス主義に對する世間の態度の鳥瞰圖として頗る興味が深い。執筆者の

面々を列擧すれば、科學大系 (The Outline of Science) といふ通俗書で我邦に馴染の深い生物學者 Prof. J. Arthur Thomson、王立科學協會々員 Prof. Leonard Hill、神祕主義の牧師 Dean Inge、經濟學者や且 Edinburgh Review の主筆たる Mr. Harold Cox、女醫學者 Dr. Mary Scharieb、通俗小説の有名な Sir Rider Haggard 宗教家側には尙二人 Rev. A. E. Garvie, Rev. F. E. Meyer、それから前述の Dr. Marie Stopes 等都合九大家の顔揃ひである。

(9) Sutherland, Halliday G. M. D. (1922) : Birth Control. A Statement of Christian Doctrine against the Neomalthusians. London. 一六〇頁

醫學者であるが、所論の表現形式は中々整然として居る。先づマルサス主義の人口の等比級數的增加と食物の等差級數的增加といふ基礎命題が實際成立しない事を立證する爲に、例を第一、スエズ運河地帯で一九〇一年より十年間に行ふた衛生施設の爲に死亡率が千分三〇・二から一九・六迄低下したが之と同時に、出生率が低

下して全人口には何の著しい變化も起らなかつた、而して回教徒はコーランによつて妊娠調節を嚴禁されて居るから此現象は人工的避妊によるものでないと主張して居る、次に鎖國日本も其例で、明治維新前、七三三—一八四六年の間は人口は常に二千六百數萬を數へて變らなかつた、斯様な期間に於て日本人が他の半開人と同じく殺兒による調節を行ふて居り、其後文明國となつた爲に其蠻行を廢した爲に現今の大膨脹を來したとは、我々英國人の想像する事も不可能な「あり得べからぬ」事であると述べて居る。

斯様な引例から始めて、事細かしい相關々係數の表と數字を列べたて、出産率と死亡率との間に明確な相關々係は無く、各々「別々に食物に關係して居る許り」でマルサス主義者の所論と實際とは違ふと力説してある。

其から後種々著者自身の信する「確證」を擧げて、結局避妊は「貴いカトリック教會の御教へ」に背く行爲であると斷案を下してある。但し評者には其斷案に至る迄の論理がどうしても

著者の信するが如くに辿る事が出来ぬ。それは無論評者の頭の悪いせいもあるが、一般に宗教に堅凝りの論者の癖として、論理の途中で行詰まると屹度「神の尊い教」が飛出して來て助け舟になり、それで自分はさつさと難關を突破して斷案に到達するを常とする。不信心者には此奇蹟の助け舟も役に立、ぬから、やむを得ず逆戻りして無縁の衆生と諦めて引下る外はない。

之は「神の建て給ふた尊いカトリック教會擁護」の一著述であるが、少し意譯を試みて神を〇〇〇〇に、又教會を國家と云ひ直せば、滿更我々日本人に沒交渉な議論でもなさうだから、今代に稀な少數意見として、且又信仰心理研究の一資料として、暇のある經濟學研究者が讀まれるもよからう。殊に一般學界と沒交渉なカトリック系學者の文献を探るにも多少の便宜は得られる、又前述の Marie Stopes 女史宣傳の花々しいのも此著者の憤慨に充ちた記述によつて其側面觀を伺ひ知れる。一言で評すれば、素人が讀めば非常に學術的な著述らしく思ひ、黑人

がよめばこけおちかしの詭辯を感じる書物。

- (10) Robinson, William J., M. D. (1922) : Birth Control or the Limitation of Offspring. 10th Ed. New York. 二五八頁

此著者は醫師で性的啓蒙運動にも頗る熱心な人、通俗書の著述も多く我日本の性的賣文業者によつて其或者は既に紹介されて居る、英語のみによつて性學一般に通じやうと試みる難境はお察しするが、此人を大家ユリスに續く祖師となすは不穩當であらう。

扱此本は米國の出版法 (Obscenity Act) に觸れぬ範圍内で、一般民衆にあてゝ妊娠調節が必要であり決して反自然の非行でない事を力説したものの、木版畫で色々無知の結果の悲劇を示したなど、アメリカ式の田舎臭い所が本の體裁に現れて居る。今から七八年前なら非常に適切な本であつたらうが、併 今日新しい本と比較すれば通俗書として多少の光が薄らいだが、専門性學者以外の人が讀んで損の行くものではあるまい。

- (11) Willis, W. N. (1921) : Wedded Love or Married Misery. London. 一八四頁

此本は前述のストープス女史の著述の普及に對抗して、其中の論點に種々論難を加へたもので、著者は可成讀書家らしいことは、引用書目で推察するが矢張り特に生物學的訓練を受けた人ではない。讀めばわかる通り、濠洲議會の一員として十數年政界にあつたと口上があるから「愛國の志士」にして大英帝國の前途を憂ひたものであらうが、表題が "Married Love" をもつた所が感心しない。其所論を個條書にする。

一、ストープス女史は理學博士 (Dr. Sc.) であり醫學士 (M. D.) でない癖に醫學上の問題を云々するのは不屆である。(かういふ當人が元議員の癖に出しやばるのも論理があひ兼ね。評者でも生物學研究をやる理學士の癖に醫學博士醫學士の領分に侵入するのは生意氣だ。日本の衆議院議員や自稱愛國者から此りを受けさうな氣がする)。

二、無差別に避妊智識の普及を試みるは有害である。よし避妊の必要な場合にも夫々適當な

専門醫師の指導があるから、生物學者の干涉は無用である。

三、邦家特に大英帝國の爲に賢明にして健全な兒を設くるは必要である。

要する所 此本はストープス女史の著書の普及に對して徒らにホステリーの恐れをなした守舊主義者が揚足取をする爲に書かれたもので、暇潰しに讀む程の價值も無い愚書である。

そして(9)の如く眞正面から新マルサス主義を叩きこわさうと試みる程の蠻勇も無く、左顧右視頗る不徹底なイヤミと泣言にみちて居る所に現代英國の世態を窺ふ事が出来る。

(12) Gair, J. P. (1921) : Sexual Science as applied to the Control of Motherhood. London. 一六〇頁

之もストープス説反對と看板をあげた所は(11)の分身と思はれる程よく似て居て、同様に天下の愚書の一、名前丈新しく人を釣り込み、下らぬ内容で呆れさす所は我邦性研究の著述の或ものによく似て居る。

一般に新マルサス主義を非とする近刊著述を特に探しても、斯様な下らぬものしか得られぬのは、蓋し種々學界俗界の興味ある變遷を示すものと解すべきものであらう。

* * * * *